

『星』はその名の通り、流れ星のように、突然僕の前に現れた。

けれどこれは、それとはまた別のお話。

* *

「ねえ、智くん。知ってる？」

放課後の図書室に星のか細い声が響いた。

僕たち以外に誰もいない、印刷インクのなんとも言えない臭いに支配された空間。だんだんと陽の光も傾き始め、窓からはオレンジ色の線が入り込んでいる。藍色のカーテンと交差した線が、長く引き伸ばした真つ黒な影を作り出していった。テーブルに投げ出されている辞書みたいに分厚い本が、まるで生きているみたいで、黒い獣がこっそりと顔を出しているようにしか見えない。本同様に投げ出されている星の赤いランドセルは影の黒と合体していて、なんだか不思議な物に見えた。星屑のような、ガラクタの様な、不思議な物。飾り気が全く無いので、とても年相応の女の子の私物とは、とても思えない。

「何？」

僕たちの会話は大抵こんな感じで始まる。

別に何年も、何十年と続けてきた決まり事でもないのだけれど、いつの間にか、そういう暗黙の決まり事があるかのように、そうなっていた。

握りしめていた鉛筆をノートの上で転がし、椅子に背中を預ける。肺から小さく大気を吐き出して僕は星を改めて一瞥した。

「星って、赤い色をした物もあるんだよ」

桃色の小さな唇の、言葉を紡ぎ出す動きを見つめ、そんな台詞が僕の耳を通り抜ける。

「うん。聞いたことはある」

でも、見たことは無い。

都会の霞んだ空しか見上げたことの無い僕は、本当の星という物を見たことが無い。そんなくせに、空を飛ぶ鳥や、雲を渡る飛行機、星を眺める子供たち、ぼんやりと半月が輪郭をなぞって浮かび上がっている。けれど、星々は当たり前のように輝いていない。

僕の中で星というものは——架空の物。

この世には存在しているようで、していない、見たことの無い、未知の輝き。

ファンタジーの世界のように、本などからしか見ることの出来ない、そう、今浮かび上がっている月みたいに遙か遠い存在。手を伸ばしたら届きそうで、まったく、届かない。だって僕たちは、僕はちっぽけな子どもなのだから。じゃあ、大人なら届くのだろうか。話になるけれど、僕が大人になった姿なんて想像出来ないから、それは出来ないのと一緒かもしれない。

「赤い星って、さそり座の心臓なんだって」

そう言って対面に座る星は、手を優しく広げた後再び握り、人差し指で僕の心臓を指さした。座ったままでは僕まで届かなかったのか、ちよっとお尻を浮かせて、きつそうな体制のまま僕の胸を撫でるように、小さな指が触れる。

星の肩にかかっている真っ黒な髪が、ぱさり、さらりと、ほどけて、シャンプーの香りを放ちながら僕の鼻孔を刺激した。

その香りがまさに、今ここに星がいるということ物語っている。

空に浮かぶ星と違って、手を伸ばせば、今まさに手を伸ばせば届く存在だということを、僕に知らせてくれる。

「えっと確か、アンタレス。そう、アンタレスだ」

僕は胸に突き刺さる指をどうしようか悩んだ結果、握り返すことも、刺し返すことも出ず、ただ顔を赤らめて、まさにアンタレスのように顔を紅潮させてそんなこと言った。

アンタレス。

赤い星。

さそり座。

僕の知らない世界。

様々な単語が僕の中を駆け巡って、流れ星のように儚く消えた。

指先がそつと僕の胸を離れ、物悲しい余韻を残す。離れていく指を目で追うと、星と目が合う。どんな星々よりも綺麗な星の瞳は、なんだか、遠い世界の存在のように思えてくる。先ほどまで、こんなに近くにいたのに。

「智くん詳しいね」

「そうかな」

微笑みかけてくる星の顔は、僕が知っているいつもの星だ。

遠くない存在。けれど、近すぎない存在。

——曖昧な距離感。

「こんなこと知ってても、勉強には役立たないよ」

そう続けて言葉を発した僕は、テーブルの上のノートと鉛筆に視線を落とす。差し込む光によってオレンジ色に染まるノートの上に踊る黒い文字の数式。

数式も、空の星も、似たような物だ。

そこにあるようで、無い。

どうしてそのような答えになるのか理解できない数式。

どこで輝いているのか解らない星々。

ただ、在るということだけが、その事実だけが、横たわっている。

赤い星がアンタレスで、さそり座の心臓だということは知っているが、その先は何も無い。いつどこでそれが見れるのか、どうして赤い色をしているのか、どういった逸話が残されているのか。

子どもだから、知らないことだらけだ。子どもだから知らないのか、それとも、知らないから子どもなのか……。こんなこと考えるから、僕は可愛く無いなんて言われるんだろうな、って心の中で苦笑した。

「星はさ、」

僕の声に星と視線が交わる。

しん、と静まり返る図書室の外から、小学生特有の元気の良い声がBGMのように響いてきて、でもあくまでそれはBGMでしかなくて。だからすぐにフェードアウトするように消えてゆき、僕たちの脳髓に焼きつくこと無く、サラッと流れていった。

「見たことあるの？ 赤い星」

この他愛の無い言葉もすぐに消え、流れる。

鎮座しているのはオレンジの線光だけだ。

「ううん。ないよ」

けれど、星には、届く。

「じゃあさ、」

首を傾けることなく、ただぼつりと言葉を発した星に対して、僕は再び溜めるように言葉を紡ぐ。どうしてこんなに、自分でも少し嫌になるくらいに、じれったいのだろうか。

でも星は、黙って静かに、僕の言葉に耳を傾けていてくれる。

「今度見に行こうよ」

「そうだね」

僕たちは、黙って、窓の外を眺め、

茜色に染まる空の先に眠るアンタレスを、見つけたような気がした。

[This story is END;Our story is ENDLESS]